
バカと雄二とLIAR GAME

tanasin

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと雄二とLIAR GAME

【Nコード】

N1879L

【作者名】

t a n a s i n

【あらすじ】

明久がLIAR GAMEに参戦することになる話です。途中で雄二に頼るため、雄二の名前が入っています。

ゲームの内容は、ドラマ版と同じになっています。（まだ原作が完結していないため。）最低でも2日に一回は更新したいと思いますので、よろしくお願いします。

そんなわけで、お楽しみください。

プロローグ(前書き)

さあ、始まりです。L I A R G A M Eの緊張感と、バカテスの和やかさのバランスをとることができのかはわかりませんが、なにとぞよろしくお願いします。

プロローグ

「おう明久。帰るのか？」

「そうしようと思っただけど・・・なんかやるの？」

「ああ、姫路が手料」ダツシュだ！僕！

ガシッ

（逃がすわけがないだろ？姫路を傷つけるのか？）

くそっ！食べるしかないのか！

（まあ待て。幸い姫路が作ってきたのは3個だ。というわけで賭け
トランプをやる。）

（そうか。わかったよ。）

かけるのは命だということがね。

結局負けてしまい、無理やり食べさせられることとなった。

「今日はひどい一日だったな・・・ん？」

大きな小包が届いていた。ついていた黒い封筒を確認もせず、小包
を空ける。

「なんだろうな・・・！！！！」

そこに入っていたのは・・・大量の札束だった。

プロローグ（後書き）

どうでしょうか。どちらかといえばL I A R G A M Eの雰囲気に近いと思います。

いま思いついたのですが、福永の位置につく人どうしまししょうWまあ後々考えていくとします。

では。次話で。

〜1億円争奪ゲーム〜 ? (前書き)

なんとか連日更新です。

休日中は何とかかなりそうですが、学校始まってからはどうなるだろう・・・

初っ端から不安な作者ですが、なんとかファイナルまで書きあげた
いです。全巻の小説版持ってて良かった・・・
無駄話はさておき、はじまりはじまり〜

「1億円争奪ゲーム」？

「なんだろうな〜・・・!!!!」
入っていたのは大量の札束だった。

「な・・・なにこれ・・・」

あわてて黒い封筒を確認する。LGT事務局？

おめでとございます。

あなたは、このたび10万分の1の確率をくぐりぬけ、
見事、L I A R G A M E T O U R N A M E N T にエントリーさ
れました。

「L I A R G A M E・・・あ！」

それは、最近はやっている、漫画が原作のドラマだった。明久も原
作を11巻まで持っている。

「本当に存在したんだ・・・」

これがL I A R G A M Eなのであれば、中に入っているのは1億
円なのだろう。ん？札束の底に、ビデオが入っているようだ。すぐ
に再生する。

『ヨシイアキヒサ様。わたくしはディーラーのレロニラです。テー
プ（これ）を観ておられるということは、라이어ゲームへの参戦
を決定されたということですね。1回戦は甲斐谷様の原作と同じで
す。吉井様なら、これでわかるでしょう。』

原作と同じであれば、ディーラーが言いたいのは開封した後での不
参加は認められない、というようなことだろう。

それよりも・・・

「僕なんかが勝てるのかな？」
当然の疑問だった。

バカ正直ではないものの、自分がバカだということは認めている。しかし負けてはならない。ただでさえ苦しいのに、これ以上お金に困るようなことがあってはならない。

雄二とかなら何とか・・・

「そうか！」

雄二に頼めばいいんだ。さすがに僕の不幸を喜ぶあいつも1億もの借金となると手伝ってくれるだろう。

「とりあえず、このことは明日にしよう。」

凡人なら興奮と負けた時の恐怖で眠れないだろうに、明久は驚くほどの速さで眠りについた。

・・・やはりバカだからだろうか。

次の日・・・

「雄二！大変だ！」

「どうした？」

「実は

「そうか、よかったな。」

「L I A R・・・って聞く気ないでしょ！しかも良かったなって！」

「まあ落ち着け。なにがあった。」

「ほんとに聞いてくれるんだね？」

「ああ、その剣幕からするとただ事じゃなさそうだな。」

「それはよかった。実は」

雄二に事の顛末を話した。

「ふむ・・・本当なのか？」

「うん。証拠にこれがあるんだ。」

黒い封筒を差し出す。すると雄二の表情が変わった。

「本当なのか…！」

ねえ雄二、それは嘘だと思ってたってことだよな？

まあしょうがないか。だれでも漫画の話が実在するって言われたら嘘だと思うよね。

「それでさ、雄二に手伝ってほしいんだ・・・」

「ああ、いいぞ」

「ほんとに！ありがとう！」

「流石に1億もの借金となるとほっておけないからな。」
僕が思っていた通りだ。

「んで？対戦相手は決まったのか？」

「ううん、まだ決まってない。」

「そうか、じゃあまだ何もできないな。」

「そりゃそうだよな。」

僕は雄二がいるという事実(ト)に安心しきって、いつものような1日を過ごした。

「たっだいま〜」

郵便受けを確認する・・・

あ！

そこには、黒い封筒があった。

『対戦相手が決まりました。』

決定したようだ。・・・誰になるのかな？

顔写真を見て・・・明久は固まってしまった。そこに写っていたのは・・・

「・・・福原先生？」

そこに写っていたのは・・・

だれからぬ、Fクラス元担任だった。

「1億円争奪ゲーム」？（後書き）

どうでしたか？

当初は対戦相手を鉄人にするつもりだったんですが、明久が毎日会っている人物なので、違和感あるな と思ったところに、元担任の名前が思い浮かびました。

フクナガっぽい役・・・いつそ登場させないか？でもな っ てか
んじで・・・迷ってます。何せ適任がないもんで・・・まあ、ま
だ少数決には入りませんので、時間はありますが。

では、次話でお会いしましょう！

〜一億円争奪ゲーム〜 ? (前書き)

どうもです。連日更新が続いてるみたいです。これも休日だから・

・
学校が始まったら、とたんに更新数が少なくなると思いますが、筆者が諦めたんだ・・・なんて、思わないでくださいね！時間がないだけなんですから！

というわけで、もう少し言いたいことがないわけでもありませんが、それはあとがきで。今は本編をお楽しみください。では。

「一億円争奪ゲーム」？

翌日・・・

「雄二！」

「おう！決まったのか？」

「そうだけど・・・どうしたの？」

雄二は、なぜか体育の半パンをはいていた。

「これは・・・気にしないでくれ。」

「ふーん」

ザワザワ・・・

「なあ、知ってるか？坂本の奴、裸Yシャツで登校してきたらしいぜ。」

「マジか！アキちゃんの女装は見なれていたが、今度は坂本が・・・」

・・・

「何か悩みがあつたら相談に乗るよ、雄二。」

「誤解するなよ！？これは翔子のせいだ！それにトランクスは死守したからギリギリでセーフのはずだ！」

「そうだよね・・・雄二の精神はギリギリのところまで行っちゃったんだよね・・・」

「だから違つって言ってんだろおっ！」

・・・30分後

「それで・・・対戦相手は誰なんだ？」

「うう・・・体の節々が痛い・・・」

「質問に答えろ。」

「対戦相手は・・・福原先生だった。」

「・・・本当だな？」

「あたりまえじゃないか。僕が雄二に嘘なんてつくと思う？」

「思う。」

「だよな・・・って全然信用ないじゃん！」

「話がそれるからツツコムな。で・・・相手は福原先生なんだな？」

「そう言ってるじゃん！」

「ああ、わかった。で・・・作戦だな。」

「うん。雄二の策に期待してるよ。」

「おいおい。それについてはお前のほうが詳しいんじゃないのか？」

「え？」

「お前全巻持ってたろう。」

「ごめん、前に売っちゃったんだ。」

「・・・バカが。」

「誤解しないでよ！？売ったのは小包が届く前なんだから！」

「ああ、わかったんだが・・・難しいな。お前内容全然覚えてないのか？」

「ゲーム名とゲームのルールくらいなら。」

「肝心の勝ち方を覚えてねーだろうが、バカヤロウ。」

「と・・・とにかく！福原先生に会いに行こうよ！一応職員室にいるでしょ！？」

「おまえ・・・知らないのか？」

「え？」

「福原先生・・・辞任したぞ？」

それは衝撃だった。お金は、家に置いてきてしまった。念のために窓やドアの施錠は確認したけど、もしかすると・・・

「おまえ・・・金・・・置いてきたのか？」

ぼくは、うなずいた。

「そりゃまずいな...とにかく、策を考えよう。万が一、盗られていた時のことも想定して。」

「そうするしかないよね。」

「あと、翔子にも協力してもらおうぞ？」

「うん。」

当然の判断だった。学年一の頭脳を誇る霧島さんなのだから。きつといい案を出してくれるだろう。

「じゃあ、とりあえず翔子に連絡を取るか。」

「その必要はない。」

「うおっ、翔子か!？」

「……うん」

「……なにしに来た？」

「ズボンを返しに。」

どうやら、霧島さんのせいというのは本当らしい。

「あと、さっきまでの話も聞いていた。」

「そうか。話が早くて助かる。それで……手伝ってくれんのか？」

「雄二が、手伝うなら、私は手伝う。」

「よし、決まったな。明久。」

「そうだね。」

どうやら、霧島さんの力を借りられるようだ。

福原先生からお金を巻き上げるのは嫌だけど……これも、勝つためだ。最後に、お金を渡せばいい。明久はそう思い、まずは勝つ。ということ、心に誓ったのだった。

〜一億円争奪ゲーム〜 ? (後書き)

どうでしたか？

なんとなく雄二から霧島さんが思い浮かんで、協力を求める形になりました。・・・この調子で仲間増やそうかな？

そして、フクナガ役の候補が決まりました。根本君です。

感想で案を出してくださいだった方、ありがとうございます！けど、根本の面が割れているため、ドラマとは、少しづつ離れることになりそうです。が、ゲームとゲームのルールは同じにするつもりです。

さらに、ライアーゲームの方で出た脇役の方も登場させようと思っ
ていますので、楽しみにしてください。

明日も更新できればいいな。そんなノリですが、今後も応援、よろしく願います。では、次話で会いましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1879/>

バカと雄二とLIAR GAME

2010年10月11日12時04分発行